特集2

東北の宗教構造をさぐる

現宗研調査部では、昭和四十五年に秋田県において農村青年の宗教意識の調査を実施し、四十六・七年の両年にわたっては、青森県木造町において主として社会構造と宗教のかかわりあいについて調査を行ってきた。現在集計分析の段階にあるのでいずれ本報告をさせて頂きたいと考えている。

宗教を外側から観察する立場に立つと社会的な文化現象として規定することができるのであるが、それは、社会制度として機能する宗教（既成教団）としての「制度的宗教」と、社会制度の崩壊過程に発生し、個人を核として形成される「個人的宗教」（新興教団）、および伝統的な民間信仰として存在し、前二者との接触の過程で互いに影響を及ぼしあう「民俗的宗教」の三つに分類することができる。

もちろんこれらは理念型としての分類であり、現実の宗教現象にこれらの純粋型が存在するわけではないけれども一つのスケールとしてこれらの概念を明確にし、現実を分析する手段として考えていきたいと思っている。

現代社会は広汎な都市化の流れの中にあり、伝統に対する反逆の時代であるとともに、伝統性への憧憬もまた徐々にではあるが出現しつつある。

もっとも興味ある部分は都市住民の宗教意識であるが、都市人口のほとんどが農村からの流入人口であり、生活様式が都市的なものであってもそこでの意識は農村的なものから完全に脱出しているとはいい切れない。

このような視点からわれわれは、農村社会の宗教のあり方を現段階においてとりあげているわけであり、ここに報告するものも、東北調査の過程で入手したデータ及び資料である。

読者の御批判と御指導を賜ることができれば幸甚である。

調査部